大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第94集

原　口　遺　跡

－県道渋見成恒中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１７

大分県教育庁埋蔵文化財センター

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第94集

原　口　遺　跡

－県道渋見成恒中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

原口遺跡空撮（北方向から）

序　　文

本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて実施した県道渋見成恒中津線道路改良工事に伴う原口遺跡の発掘調査報告書です。

原口遺跡の所在する中津市三光は、大分県北西部にある中津市のほぼ中央部に位置します。周辺には犬丸川流域に縄文時代の集落である法垣遺跡、県北最大級の弥生集落である諫山遺跡、県内最大級で横穴墓の初現期から造営された上ノ原横穴墓群、九州でも大規模な伊藤田窯跡群、相原廃寺や塔ノ熊廃寺などの古代寺院、下毛郡衙の正倉とされる長者屋敷官衙遺跡などがあります。また、原口遺跡に近接する諫山遺跡では、15世紀中頃に集落が形成されます。このように当該地域は豊かな歴史と文化を誇っていたといえます。

発掘調査範囲は原口遺跡のほぼ中央部にあたります。調査の結果、溝状遺構、井戸などの遺構と土器や陶磁器類などの遺物を確認し、原口遺跡の性格を知る資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財の保護・啓発とともに、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただいた関係各位に対し、衷心から感謝申しあげます。

平成29年３月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所　長　　後藤　一重

例　　言

1　本報告書は、大分県教育委員会が平成27年度に実施した、県道渋見成恒中津線道路改良工事に伴う原口遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて、大分県教育委員会が実施した。

3　発掘調査は、（有）九州文化財リサーチに支援業務を委託して実施した。

4　遺物の洗浄作業、註記、接合、実測、トレース、写真撮影等の整理作業は、平成28年度に（株）九州文化財総合研究所に委託して実施した。

5　出土遺物及び関係資料は、大分県教育庁埋蔵文化財センターで保管している。

6　本書で使用した地形図（「土佐井」１／25,000）は国土地理院作成のものである。

7　本書の執筆・編集は、大分県教育庁埋蔵文化財センター受託事業班の小林昭彦が担当した。

目　　次

序　　文
例　　言

第１章　調査の経過と概要 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　発掘調査の経過 …… 1
第３節　整理・報告書作成の経過 …… 1
第４章　調査組織の構成 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
第１節　地理的環境 …… 2
第２節　歴史的環境 …… 2

第３章　調査の成果 …… 5
第１節　遺跡の概要 …… 5
第２節　遺構 …… 5
第３節　出土遺物 …… 9

第４章　まとめ …… 10

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　原口遺跡及び周辺遺跡分布図 …… 3
第２図　原口遺跡調査区位置図 …… 4
第３図　溝１・２実測図 …… 6
第４図　溝３・４実測図 …… 7
第５図　井戸実測図 …… 8
第６図　出土遺物実測図 …… 9
第７図　上宮宮番料所の分布図 …… 10

写真図版目次

写真図版１　区域１溝１・２ …… 13
写真図版２　区域２溝３・４ …… 14
図版３　出土遺物 …… 15

第１章　調査の経過と概要

第１節　調査に至る経緯

平成27年４月14日、工事対象地にトレンチを設定し、重機で掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認する調査を実施した。その結果、古代の遺物細片を含む溝２条を検出した。このため、平成27年６月から本調査を実施することとなった。

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）が調査主体となって実施した。表土除去、遺構埋土の掘下げ、実測作業、写真撮影などは支援業務として民間調査機関へ一括して委託する体制をとった。委託内容は、①重機による表土除去、②人力による遺構検出、③人力による遺構埋土掘下げ、④遺構実測、⑤遺構写真撮影、⑥現場管理などであった。センター職員（調査員）は調査区の設定、遺構輪郭・遺構埋土の確認、遺構の構造や遺物の出土状態を把握し、受注業者の調査技師に工程ごとに技術的指導を行い、調査精度の確保と調査工程の管理に努めた。調査区は２区に分けて実施し、北から区域１、区域２とした。

（調査工程の概要）

平成27年６月２日　区域１の重機による表土除去開始し、終了
６月４日　区域１の作業員による遺構検出開始
６月６日　区域１の作業員による遺構埋土掘下げ開始
６月13日　区域１の空中写真撮影、遺構の個別写真撮影・実測図作成
６月15日　区域１の発掘作業終了
６月16日　区域２の重機による表土除去作業及び区域１の埋戻し開始
６月17日　区域２の表土除去終了、遺構検出開始、区域１埋戻し終了
６月25日　区域２の実測を終え、原口遺跡の発掘作業を終了

第３節　整理・報告書作成の経過

整理作業は、基礎作業と資料作成を一括して委託し、作業場所をセンターとして実施した。委託内容は、①遺物水洗、②遺物註記、③遺物接合、④遺物復元の４工程（前半工程）、⑤遺物実測、⑥遺物観察表作成、⑦遺物実測図トレース、⑧遺物写真撮影の４工程（後半工程）及び遺物取出、遺物区分・収納等の各作業であった。センター職員は、遺物図版・遺構図版の作成、遺構及び遺物写真図版の作成、原稿執筆、編集作業を行った。整理作業は平成28年５月～平成28年８月に実施した。

報告書作成は、原稿執筆、図版作成を12月１日から開始し、平成29年１月20日に終了した。入稿は２月３日～２月28日に行い、初稿を平成29年３月２日に受領した。３月15日校了、３月31日に報告書納品

第４節　調査組織の構成

調査時の調査体制は下記のとおりである。

平成27年度

後藤一重	埋蔵文化財センター	所長
小柳和宏	埋蔵文化財センター	次長
安藤正廣	埋蔵文化財センター	管理予算班主幹（総括）
小林昭彦（調査担当）	埋蔵文化財センター	受託事業班専門員

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

原口遺跡は中津市三光原口に所在する。中津市は県北西部に位置し、北部は周防灘に面し、南部は日田市・玖珠町、東部は宇佐市、西は山国川を境に福岡県と接する。中津市は旧城下町にあたる市の中心部や沖代平野を除くと山間部が占める範囲が広く、全体の約75％は山林である。

原口遺跡は海岸部から広がる平野部の南に展開する丘陵部に位置する。西側には山国川の蛇行に沿って河岸段丘が広く形成されている。段丘崖面と遺跡の位置する台地とは約10mの比高差がある。台地の東側は犬丸川が北東方向へ流れており、同様に比高差10mをもつ。この台地は山国川犬丸側に挟まれた独立した台地を呈しており、東西500m、南北1,500m範囲をもち起伏の少ない平坦な地形である。調査範囲はこの台地の北端部に近い位置にあたる。一方、南側に標高659.4mの八面山を望む。調査の起因となった改良予定の県道西側及び南に現在の集落が形成されている。

第２節　歴史的環境

旧石器時代では、上ノ原遺跡、法垣遺跡などで遺物が確認されている。

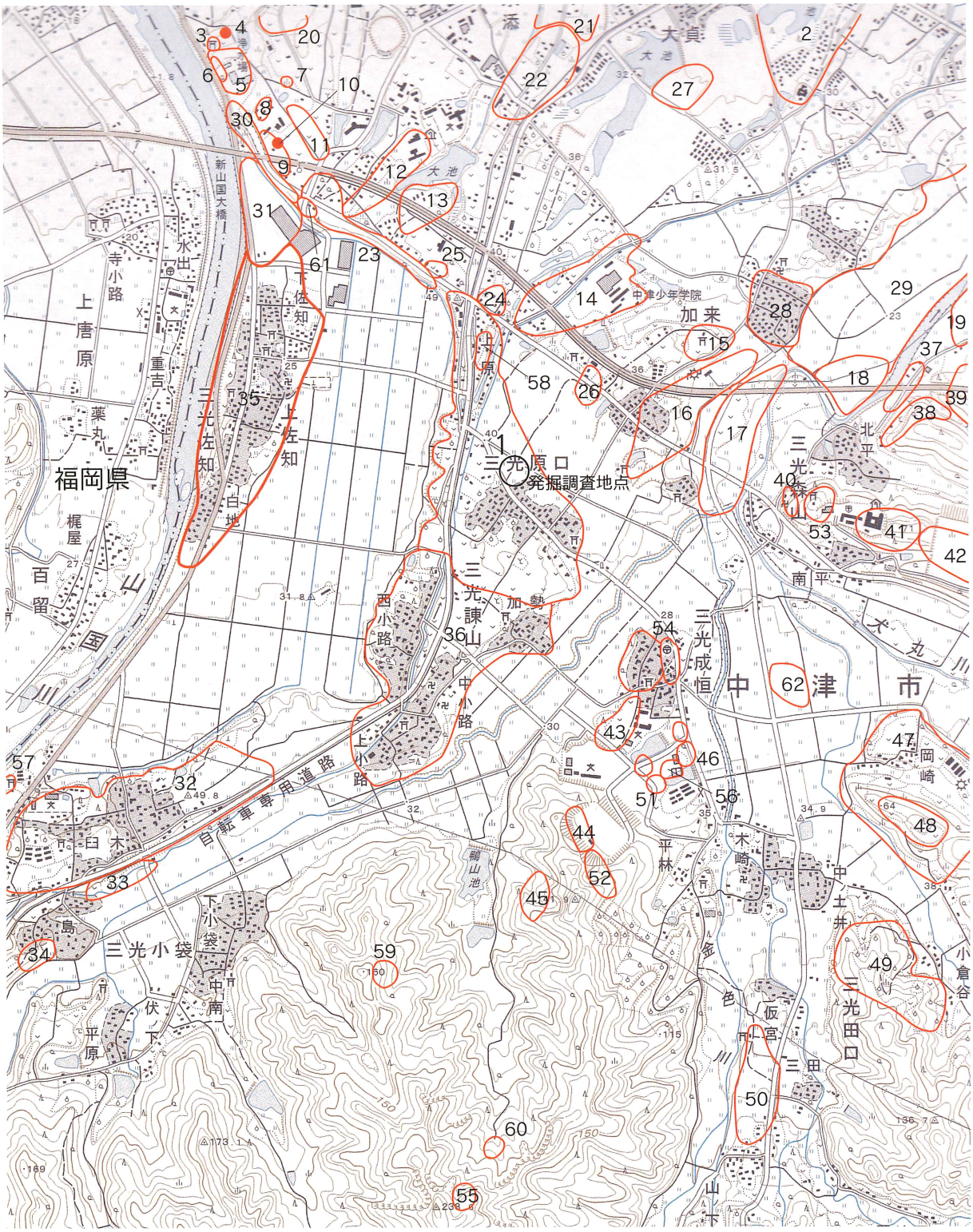
縄文時代では、佐知遺跡、法垣遺跡、槙遺跡が集落として知られているが、法垣遺跡では後期の竪穴建物に加えて６棟の掘立柱建物が発見され、その性格についても高い関心がもたれた。

弥生時代では集落形成がみられる。前期～後期の佐知遺跡、諫山遺跡は中期から後期の大規模な集落として注目された。このほかに上ノ原平原遺跡の貯蔵穴群、樋多田遺跡の水田層や水路などの生業にかかる遺構や岡崎遺跡の石蓋土坑や石棺など当時の墓制を示す遺構などが確認されている。

古墳時代では、山国川の右岸に展開する上ノ原横穴墓群が重要である。80基を越す横穴墓の調査によって５世紀後半～７世紀中頃に展開した横穴墓の墓制や人骨調査から親族構造などの研究の深化をもたらした。周辺の横穴墓や古墳の分布も顕著であり、臼木古墳群、倉迫平古墳、洗添横穴墓群などが知られている。なお、東部の丘陵斜面には、伊藤田窯跡群が形成されており、６世紀後半に開窯し、８世紀前半までの連続的な操業が知られている。古墳時代の須恵器生産地としては、規模や操業期間ともに九州有数である。東九州では南限にあたる。

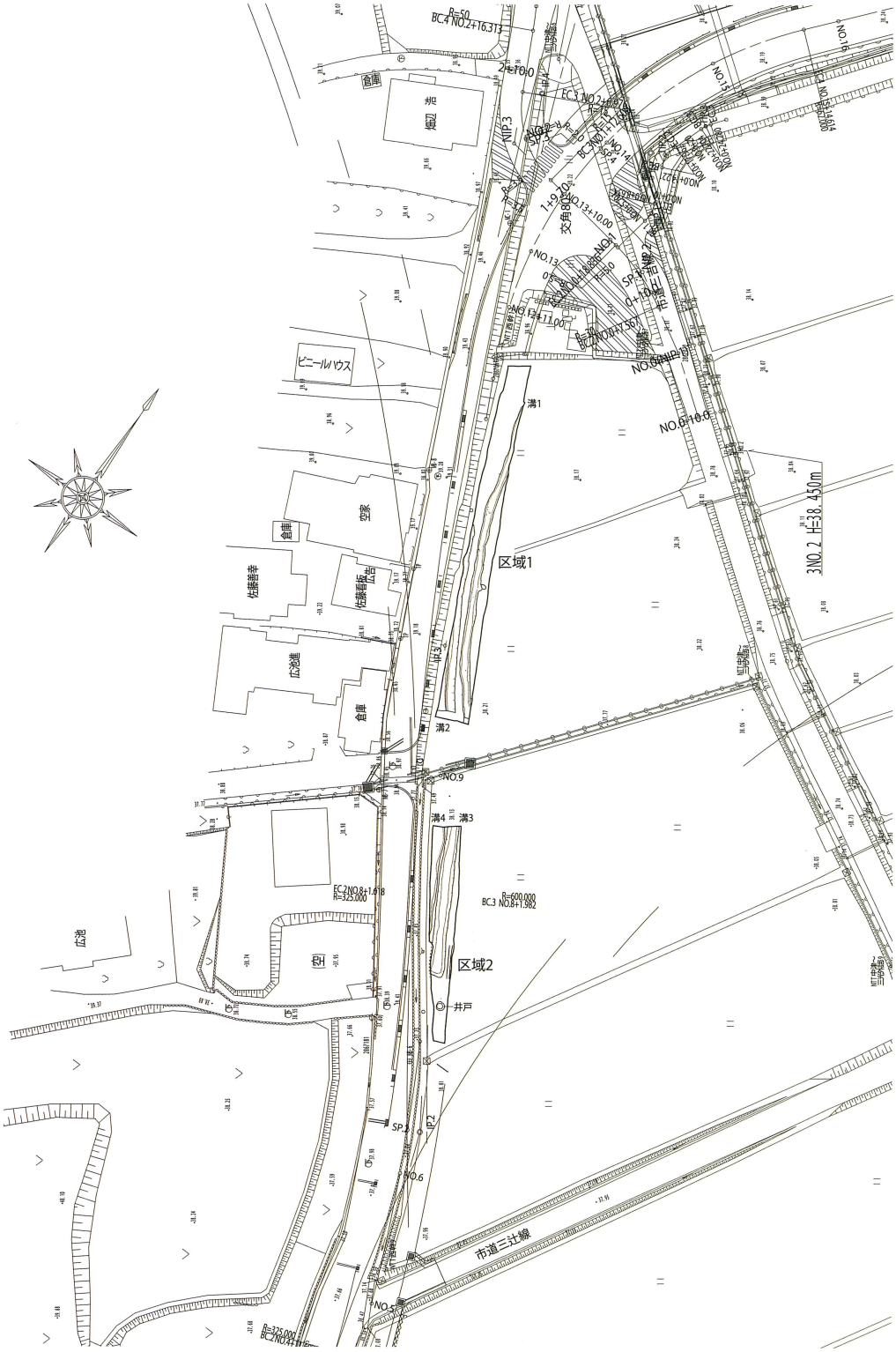
古代では、相原廃寺、塔ノ熊廃寺の古代寺院などが所在する。古墳時代から引き続き操業が継続した伊藤田窯跡群ではコンゲ窯跡や梨ヶ迫窯跡などの須恵器窯に加え、ホヤ池窯跡で瓦生産が始まり、この地域の古代寺院への供給窯として機能した。嶋ノ町遺跡は犬丸川右岸に展開する水田地域に所在するが、石包丁が確認されており弥生時代から低地を水田として利用されたと想定されている。８世紀～10世紀には水田や流路が確認されており水田耕作が大きく展開したことがわかる。古代以降も水田が営まれた。

中世では、原口遺跡と隣接する諫山遺跡で検出された屋敷区画が室町時代から江戸時代まで存続することが確認されている。この地域の領主的な人物の屋敷地、一般の屋敷地のあり方やその変遷過程が小字や現地の地割りなどの分析を通じて明らかにされている。



1.原口遺跡　2.御澄池周辺遺跡　3.坂手前横穴墓群　4.鶴市神社裏山古墳　5.坂手隈城跡　6.坂手隈横穴墓群
7.相原古墳群　8.幣旗邸古墳群　9.勘助野地遺跡　10.上人塚古墳　11.柳ヶ迫池東遺跡　12.六畝町遺跡
13.大池南遺跡　14.清水郎西遺跡　15.大幡城跡　16.黒水遺跡　17.法垣遺跡　18.樋多田遺跡　19.犬丸川流域遺跡
20.相原山首遺跡　21.長者屋敷官衙遺跡　22.稲男田遺跡　23.上ノ原平原遺跡　24.清次郎原遺跡　25.上ノ原稲荷塚遺跡
26.槙遺跡　27.中ノ林遺跡　28.加来居屋敷遺跡　29.加来東遺跡　30.上ノ原横穴墓群　31.佐知久保畑遺跡
32.臼木遺跡　33.臼木古墳群　34.外園遺跡　35.佐知遺跡　36.諫山遺跡　37.権現島遺跡　38.北平横穴墓群
39.森山遺跡　40.洗添横穴墓群　41.美濃尾遺跡　42.倉迫平遺跡　43.成恒遺跡　44.庵ノ尾横穴墓群　45.鴨山横穴墓群
46.瑞雲寺遺跡　47.岡崎遺跡　48.岡崎城跡　49.田口遺跡　50.仮宮遺跡　51.成恒笹原遺跡　52.大迫平横穴墓群
53.北平城跡　54.田島崎城跡　55.辰の口洞穴　56.瑞雲遺跡　57.土田城跡　58.耳とり池遺跡　59.コウゴウ石遺跡
60.鴨山谷奥遺跡　61.上ノ原遺跡　62.嶋ノ町遺跡

第１図　原口遺跡及び周辺遺跡分布図



第２図　原口遺跡調査区位置図

第３章　調査の成果

第１節　遺跡の概要

調査は、県道渋見成恒中津線改良工事の予定地のうち、延長100m、幅２m～５mの細長い範囲を２区に分けて実施した。北半部を区域１、南半部を区域２と区分した。調査面積は336㎡であった。

区域１・２とともに県道と並行する溝２条を確認した。

第２節　遺構（第３図～第５図）

溝１は調査区の北東端から南東端へ延び、長さ48m、幅約1.5mの規模であった。溝１の土層断面を３箇所で観察した。土層断面１では上層から暗茶褐色土層、淡茶褐色土層の堆積がみられた。土層断面２・３では同様に２～３層の堆積土を確認した。ともに溝の底面は平坦であった。このように溝の断面形は底面が平坦で広く、壁がやや緩やかな形状を示していた。土層断面１と３の底面の比高は５㎝程度であり、土層断面３が低く、北から南へ緩やかに傾斜していたと思われる。時期は出土遺物から14世紀～15世紀と考えられる。

溝２は調査区の中央西辺から南へ長さ28m程を確認した。溝の底面と西側の立上りは調査区外となるため不明であるが、幅は３m以上の規模と想定される。溝２の土層断面を２箇所で観察した。土層断面２では暗茶褐色土層の堆積がみられた。土層断面４では溝の底面が平坦でやや広く、壁の立上りは緩やかであった。堆積土は上層から暗茶褐色粘質土層、茶褐色粘質土層、暗茶褐色粘質土層、黒黄褐色土層を確認した。溝の時期は、出土遺物がないため不明であるが、堆積土の状況から近世以降と想定される。

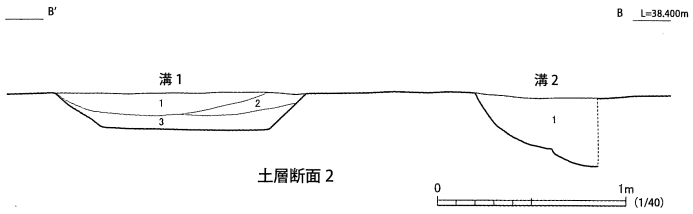
区域２では、区域１と同様に南北方向に延びる溝３・４の２条を確認した。

溝３は調査区の北端ほぼ中央から南へ延び、長さ23mで溝の南端部となった。幅は約２mであった。溝の土層断面を３箇所で観察した。土層断面５では上層から黒茶褐色土層、粘質黄褐色土層の２層の堆積がみられた。土層断面６では上層から暗茶褐色粘質土層、黒黄褐色粘質土層、マンガン層、黄褐色土層、土層断面７では上層から暗黄褐色土層、マンガン層、黒黄褐色土層の３層の堆積土を確認した。ともに溝の底面はほぼ平坦であり、壁がやや緩やかな形状を示していた。溝の覆土中から16世紀前半代の肥前陶器碗が出土した。

溝４は調査区の北西端から中央西辺の長さ16mを確認した。溝の西側壁は調査区外となるためが、幅は２m以上の規模と想定される。土層を土層断面５で観察すると、上層から黄褐色土層、粘質明黄褐色土層、粘質黄褐色土層であった。溝の底面は平坦であった。

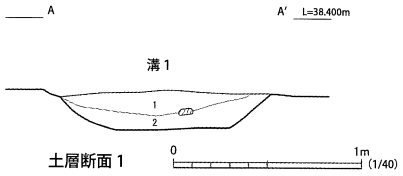
溝は区域１で２条、区域２で２条確認したが、区域１・２の間に農業用水路を保護する土手を設けたため、溝間の連続を確認していない。溝の方向性からみると、溝１と溝３、溝２と溝４が連続する可能性がある。溝３は南端部を確認しており、以南には延びない。しかし、ブリッジ状に溝が途切れ、その南に溝が設置されている可能性はある。一方、溝３が南端から西側へ屈曲する可能性は、調査区西辺の立上りからみると低い。

溝の時期については、溝１・３は14世紀～15世紀の可能性があり、溝２・４は近世以降と想定される。



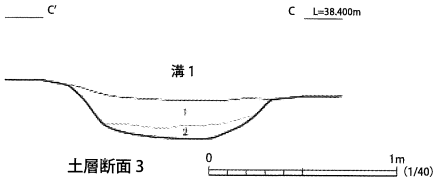
土層断面 2

溝1
1. 暗茶褐色粘質土層　（淡橙褐色のブロック土を少量含む。溝 1 の堆積土。1～2cm 程の礫を少量含む。）
2. 淡茶褐色粘質土層　（淡橙褐色のブロック土を含む。）
3. 淡橙褐色粘質土層　（地山と同様の淡橙褐色土が主体。）
溝 2
1. 暗茶褐色粘質土層　（溝 2 の埋土。暗黄褐色のブロック土を含む。）



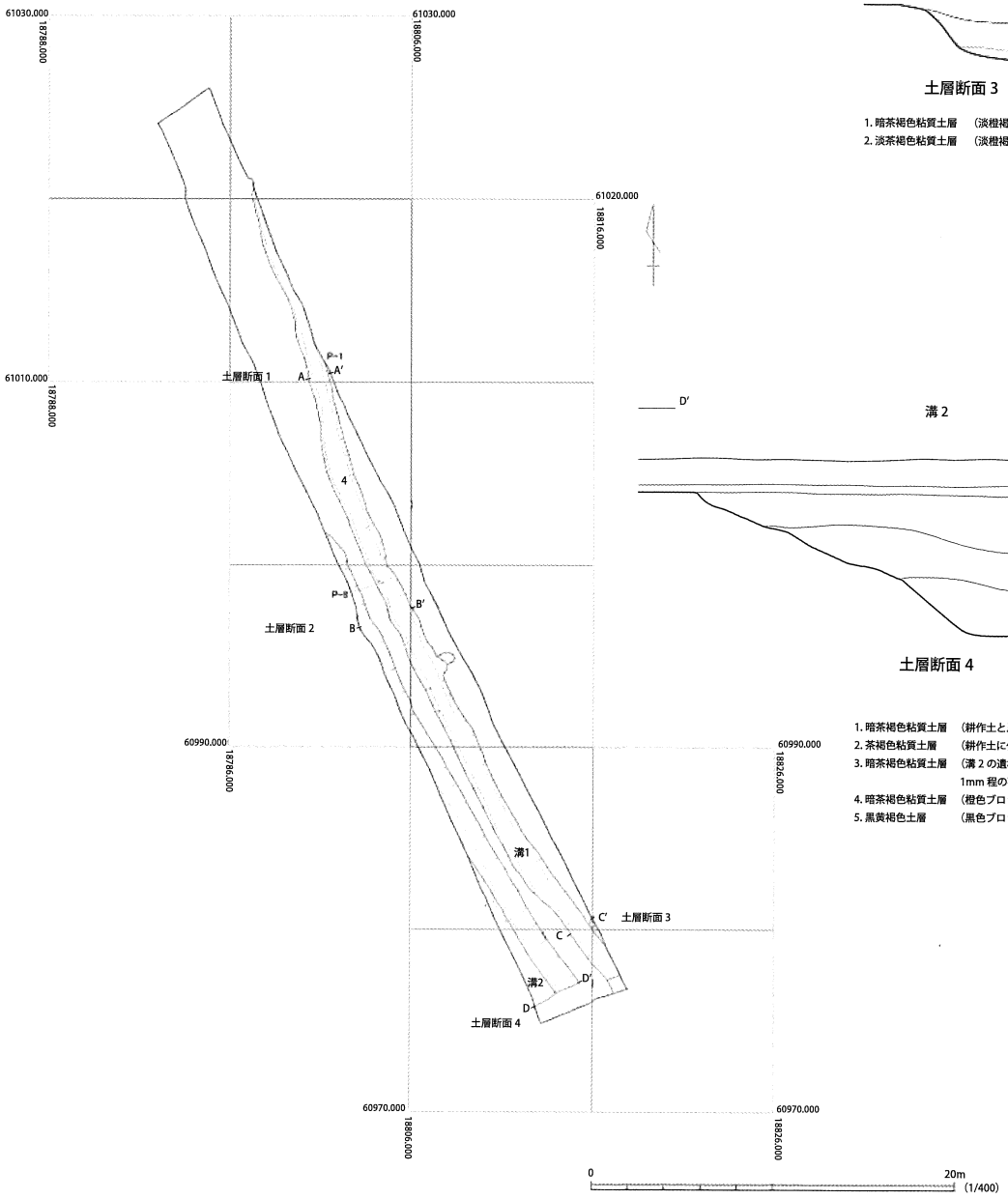
土層断面 1

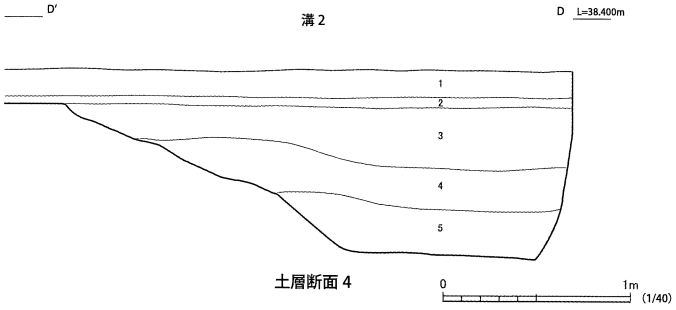
1. 暗茶褐色粘質土層　（淡橙褐色のブロック土を少量含む。）
2. 淡茶褐色粘質土層　（淡橙褐色のブロック土を含む。）



土層断面 3

1. 暗茶褐色粘質土層　（淡橙褐色のブロック土を少量含む。）
2. 淡茶褐色粘質土層　（淡橙褐色のブロック土を含む。）

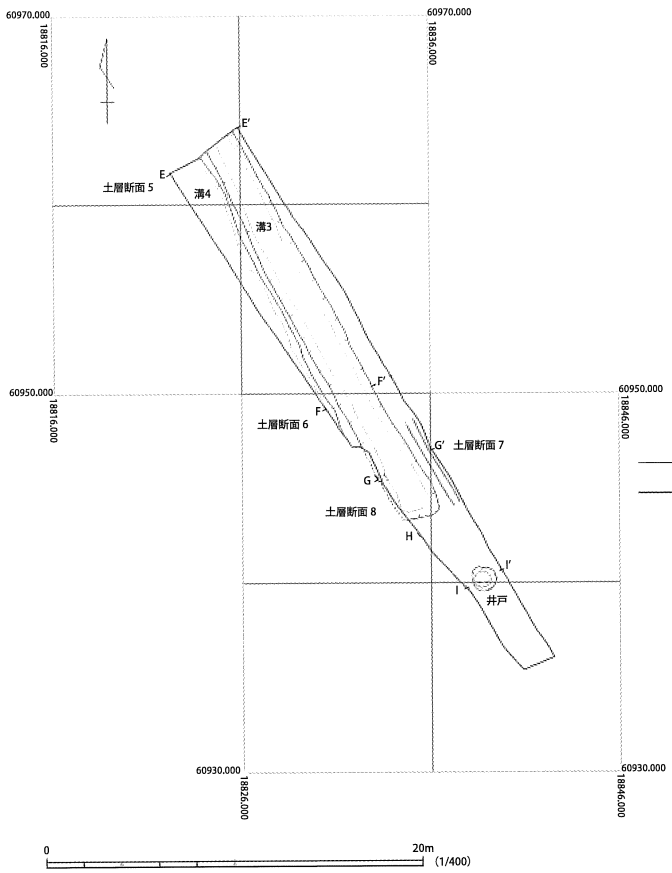


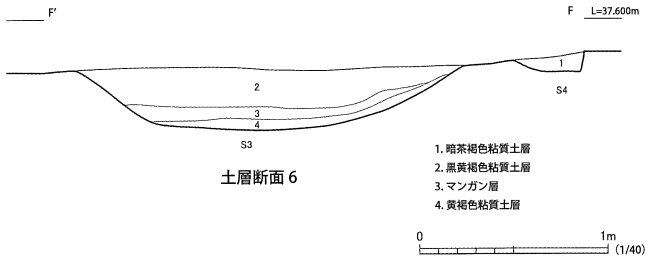


土層断面 4

1. 暗茶褐色粘質土層　（耕作土と思われる。黒褐色ブロック土及び橙褐色ブロック土を少量含む。）
2. 茶褐色粘質土層　（耕作土に伴う床土と思われる。）
3. 暗茶褐色粘質土層　（溝 2 の遺構埋土。明黒褐色及び暗黄褐色のブロック土を含む。1mm 程の砂利を少量含む。）
4. 暗茶褐色粘質土層　（橙色ブロック土マンガン含む。）
5. 黒黄褐色土層　（黒色ブロック土を少量含む。）

第３図　溝１・２実測図

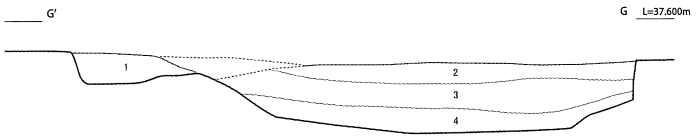




土層断面 6

1. 暗茶褐色粘質土層
2. 黒黄褐色粘質土層
3. マンガン層
4. 黄褐色粘質土層

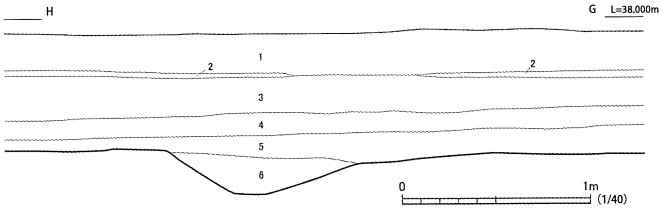
0 1m (1/40)



土層断面 7

1. 黒黄褐色粘質土層
2. 暗黄褐色土層
3. マンガン層
4. 黒黄褐色土層

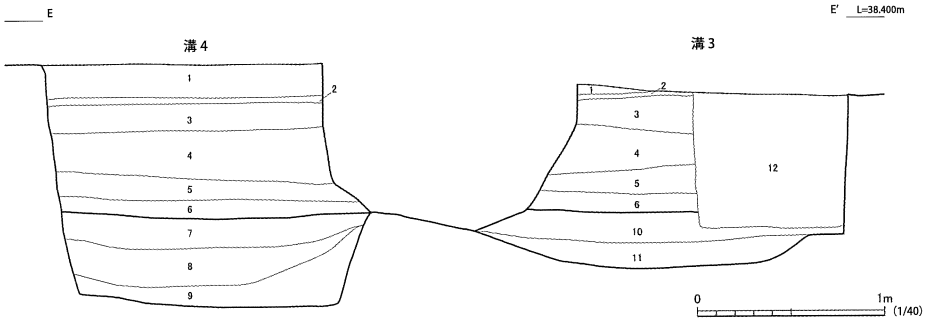
0 1m (1/40)



0 1m (1/40)

土層断面 8

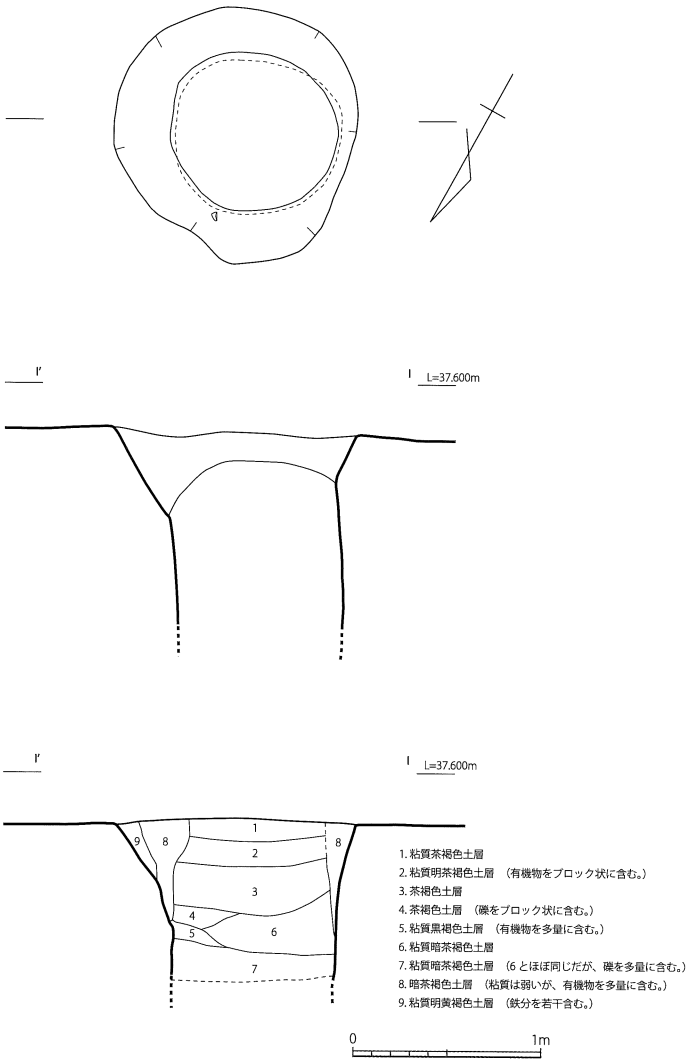
1. 現代水田の耕作土
2. 現代水田の床土
3. 黒茶褐色土層（旧水田の耕作土）
4. 粗粒黄褐色土層（旧水田の床土）
5. 粗粒暗黄褐色土層
6. 硬質粗粒黒茶褐色土層（溝 3 の埋土）



土層断面 5

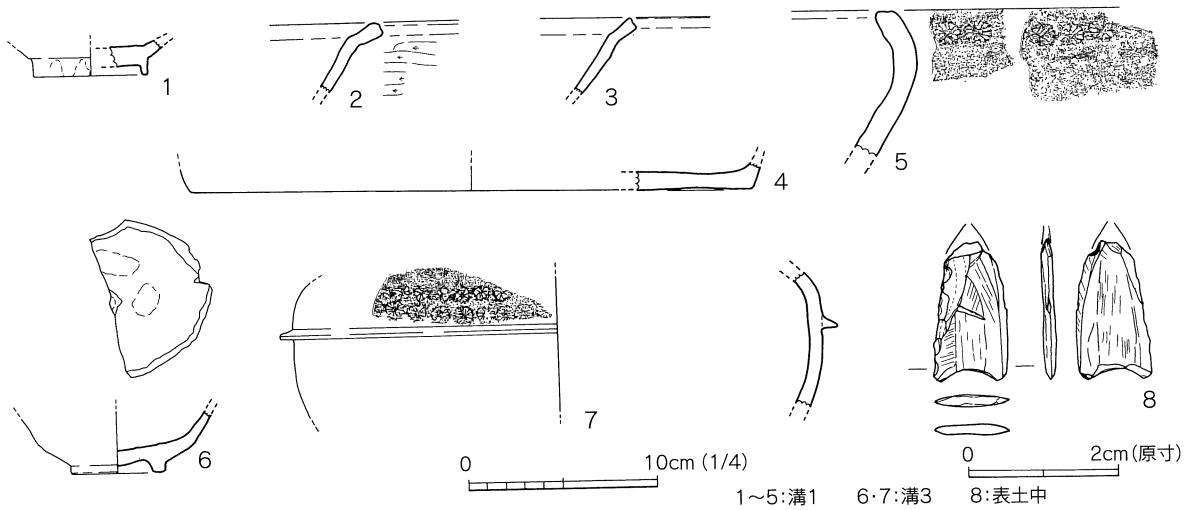
1. 灰褐色土層（現水田の耕作土）
2. 黄褐色土層（現水田の床土）
3. 灰色土層
4. 暗灰褐色土層
5. 灰褐色土層
6. 粘質暗黄褐色土層
7. 黄褐色土層（溝 4 の埋土。）
8. 粘質明黄褐色土層（溝 4 の埋土。）
9. 粘質黄褐色土層（小礫を少量床面に含む。）
10. 黒茶褐色土層（溝 3 の埋土。マンガンを含む。）
11. 粘質黄褐色土層（溝 3 の埋土。）
12. 試掘トレンチ

第４図　溝３・４実測図



第５図　井戸実測図

井戸は調査区の南端で確認した。溝３の南端から南４ｍに位置する。井戸の平面形は上端で径1.3ｍ～1.4ｍの不整円形、井筒部分で径0.9ｍの円形を呈する。井戸の基底面は確認できていないが、深さ約１ｍまでの土層堆積状態は観察できた。上層から粘質茶褐色土層、粘質明茶褐色土層、茶褐色土層、混礫茶褐色土層、粘質黒褐色土層、粘質暗茶褐色土層、混礫粘質暗茶褐色土層の堆積を確認した。井戸の上部付近では壁際に暗茶褐色土層、粘質明黄褐色土層がみられ、井戸枠の抜き跡もしくは痕跡と考えられた。時期は出土遺物がなく不明であるが、近世以降と想定したい。



第６図　出土遺物実測図

第３節　出土遺物（第６図）

各溝の覆土などから土器、陶磁器類が出土した。

１は溝１の底面から出土した中国製白磁碗の底部破片である。底部は１／８を残すが、大きさは径６㎝を復元できる。胎土は精良、焼成は良好である。ロクロで成形され、底部外面にはナデで調整されている。透明釉が施される。時期は12世紀～13世紀と思われる。２は溝１の覆土上層から出土した瓦質土器の破片である。鍋と考えられる。口縁部は短く屈曲し、断面形が矩形を呈す。胎土には長石・石英を多く含む。ロクロで成形され、内外面をナデ、ヘラ削りで調整している。焼成は良好である。色調は外面が黒灰色、内面は灰白色で、外面にススが付着している。３は溝１覆土上層から出土した土師質土器である。鍋と思われる。口縁部は短く緩く屈曲する。胎土には石英を多く含む。ロクロで成形され、内外面をナデで調整している。焼成は良好である。色調は外面が暗灰褐色、内面は灰褐色で、外面にススが付着している。４は溝１から出土した瓦質土器の破片である。１／８程残る底部の形状から火鉢と考えられる。復元底径28.8㎝の大きさである。胎土には長石・石英を多く含む。ロクロで成形され、内外面をナデで調整している。焼成は良好である。色調は外面が黒灰色、内面は灰黄色を呈す。５は溝１から出土した土師質土器の破片である。鉢と考えられる。口縁部は端部で強く内湾する。胎土には長石・石英を多く含む。ロクロで成形され、内外面をナデで調整している。焼成は良好である。色調は内外面ともに灰褐色を呈す。口縁部外面に菊花文のスタンプが施されている。時期は14世紀～15世紀と思われる。６は溝３から出土した肥前陶器碗の底部破片である。底径は5.8㎝の大きさである。胎土は精良、焼成は良好である。ロクロで成形され、内外面に灰褐色の釉が施される。高台周辺はナデ調整がみられる。内面に胎土目が２箇所残る。時期は1600年～1630年代と限定できる。７は溝３の覆土上層から出土した瓦質土器の破片である。羽釜と考えられる。胎土に長石を多く含む。ロクロで成形され、内外面をナデで調整している。外面上部に菊花文が上下二段に施されている。色調は外面が黒灰色、内面は灰白色である。時期は14世紀～15世紀と思われる。８は溝１覆土から出土した弥生時代の緑泥片岩製の磨製石鏃である。先端を欠く。

第４章　まとめ

原口遺跡では、旧字図の字境に沿って南北に伸びる２条の溝を確認できた。調査区は現在の用水路で分断された２地区となっているが、区域１の溝１と区域２の溝３、区域１の溝２と区域２の溝４がそれぞれ連続するものと考えた。このうち溝３は南端部を確認しており、以南には延びない。しかし、ブリッジ状に溝が途切れ、その南に溝が設置されている可能性はある。一方、溝３が南端から西側へ屈曲する可能性は低い。溝の時期については、出土遺物から溝１・３が14世紀～15世紀、溝２・４は近世以降と想定される。溝は中世と近世に区分でき、ともにほぼ同じ位置に設置されている。

中世の原口、成恒、諫山には宇佐神宮の宮番料所が点在していた。このうち大字原口には、原口遺跡の南東400ｍ付近に比邑垣（びわがき）、田崎（たざき）、時本（ときもと）、棚垣（たながき）など当時の地名が小字名に残っている。さらに、600ｍ南東には田嶋崎城が所在する。15世紀末頃に諫山氏から「田嶋崎」での名主権を受け継いだ成恒氏がこの城館を拠点として原口を含む当地域での支配を拡大したとされる（註１）。

原口遺跡周辺の中世集落をみると、隣接する諫山遺跡では屋敷地を示す区画溝が確認されており、屋敷地の小字名から中世から近世に変容する村落構造の類型が示されている（註２）。居住者を示す「中原屋敷」などの屋敷地と「居屋敷」の地名である。前者は領主的な存在と関連を持つと考えられ、近世への変遷過程で存続しないが、後者の居住者は村の構成員として「ムラ」とともに存続するとされている（註２）。

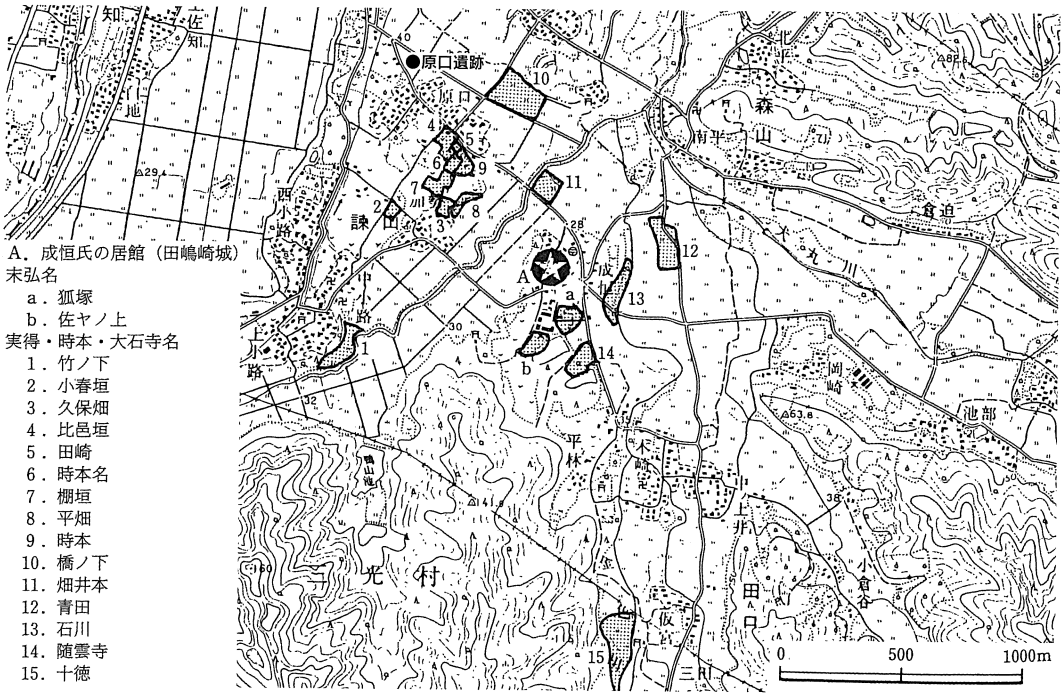
本遺跡の溝１・３は西に位置する原口屋敷（小字名）の東を区画する溝と想定した。

原口地区の残存する字名から推定される範囲・規模はほぼ現在の集落と重なるものと思われ、今回調査した溝は中世の屋敷地の区画、集落景観の一端を示すものと考えられる。

また、近世の溝２・４は中世とほぼ同じ位置に設置されていることから機能の継続性が想定される。

註１　三光村1988『三光村誌』

註２　小柳和宏　2016　７）小結　『諫山遺跡』　本文・遺物図版編（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第86集）大分県教育庁埋蔵文化財センター



第７図　上宮宮番料所の分布図（文献１に加筆・修正）

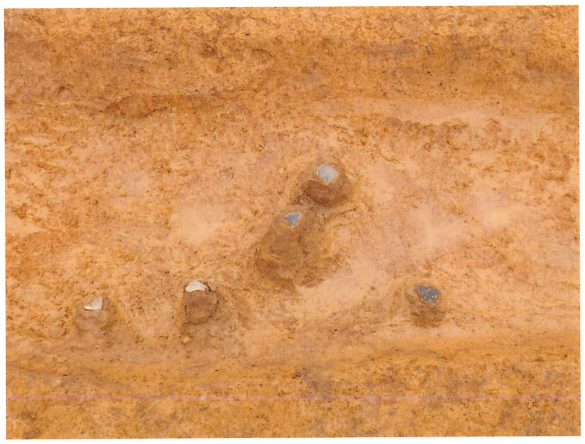
写　真　図　版

区域１　溝１・２全景（南方向から）

区域１　溝１・２全景（北方向から）

区域１　土層断面２（北方向から）

区域１　土層断面３（北方向から）



区域１　溝１　遺物出土状態（西方向から）

区域１　土層断面４－溝２－（北方向から）

写真図版二

区域２　溝３・４全景（北方向から）

区域２　土層断面５－溝４－（南方向から）

区域２　土層断面６（北方向から）

区域２　土層断面７（北方向から）

区域２　井戸全景（北方向から）

区域２　井戸土層断面（北方向から）

1

2

3

4

5

6

7

8

報告書抄録

ふりがな	はるぐちいせき
書名	原口遺跡
副書名	県道渋見成恒中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第94集
編著者名	小林昭彦
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870－0152　大分市牧緑町１－16
発行年月日	平成29年（2017）　３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		調査次数	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号						
はるぐちいせき 原口遺跡	なかつしさんこうはらぐち 中津市三光原口	203	157		33°32′59″	131°12′9″	2015年6月2日 ～ 2015年6月25日	336	県道渋見成恒中津線道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原口遺跡	集落	中世	溝	土器、陶磁器類、石器	屋敷地を区画する溝

要約	原口遺跡では、旧字図の字境に沿って南北に伸びる２条の溝を確認できた。溝１・３は西に展開する集落のうち、原口屋敷の東を区画する溝と想定される。屋敷地の区画や中世の集落景観の一端を示すものと考えられる。

原　口　遺　跡

県道渋見成恒中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第94集

平成29年３月31日

編集・発行　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870－0152　大分市牧緑町１－16
TEL（097）552－0077

印　　刷　株式会社　明文堂印刷
〒870－0023　大分市長浜町１－２－２
TEL（097）533－8800